

茨城県守谷市

市民協働で人口が増え続けるまちづくり



守谷市の景観 写真提供：守谷市

茨城県内の44の市町村を、それぞれにゆかりのある筑波銀行の支店長がご紹介します。第23回は、守谷市です。筑波銀行は、守谷市内に2か所3か店の営業店を設置し、守谷市の皆さまと密接な関係を築いています。守谷支店長の井ノ崎昭が、守谷市長 会田真一氏にお話を伺いました。

●守谷市が一番と考えていること、自慢できることはなんですか

本市は、東洋経済新報社が毎年発表している公的統計をもとにした「住みよさランキング2014」では全国5位、主婦向け雑誌のインターネットアンケートによる「主婦が幸せに暮らせる街ランキング」では、全国8位になりました。昭和45年の国勢調査時の本市の人口は12,300人から平成27年4月1日現在では、64,933人と順調に増加し、これらのランキング通り、転入先として選ばれていることを嬉しく感じています。

人口の増加に伴い、子どもの数も増加し、全人口に占める子どもの割合は16.2%と、県内1位です。子育て世代が安心して暮らせるよう、子育てに関する施策に力を入れています。予防接種のヒブワクチンは定期接種に指定される以前から無料で実施し、B型肝炎ワクチンも無料で実施しています。小・中学校の設備は、全ての校舎の耐震化が完了し、全教室にエアコンと電子黒板を設置しました。外国語教育は、「国際理解教育全体計画」に沿って外国語指導助手（Assistant Language Teacher 略してALT）を全小中学校に常時1名ずつ配置して取組み、小学生は毎月「ALTと遊ぶ」という授業を行い、中学生は茨城県独自の取組みである英語による双方向コミュニケーション技能を競う「英語インタラクティブ・フォーラム」の大会への出場を目指した授業を行っています。

インフラ整備にも力を入れ、下水道普及率は茨城県内1位です。

市民協働のまちづくりを20年以上前から進めており、市内を通るTXや常磐自動車道の茨城県玄関口の両側の斜面林を市が買い取り、そこに緑を残し、美しい景観を保全する作業を市民ボランティアの皆さんが実施しています。

「守谷野鳥の森散策路・鳥のみち」の整備も守谷市観光協会により協働で行いました。30年近く放置された休耕田がもとの湿地に戻り、様々な植物が繁茂し、周りの斜面林とともに生物の宝庫となり、100種以上の野鳥の天国となりました。しかし、人の手が入らないため、市街地付近ではゴミの不法投棄もありました。この自然を保全し活用するため、尾瀬の木道を思わせる歩道が、守谷市観光協会と地域ボランティア、近隣の小・中学生との協働により完成しました。

人口増加はメリットばかりではありません。昭和50年代後半に住宅公団が開発した住宅団地に続々と入居した当時30～40歳の方が、一線を退く世代となり、急速に高齢化が進みました。本市全体の高齢化率は18.9%ですが、市内の各地域の差が大きく、地域ごとに必要な活動は全く異なります。

平成23年～24年の2年間をかけて、地域福祉活動計画を策定し、この計画を着実に推進していくために、「地域担当職員制度」を導入し、全職員に担当地域を割り当てました。職員は自分の担当する自治会、町内会で開催される総会や各種行事に参加し、市民とともに地域福祉活動計画の取組みについて話し合い、実行していきます。

●まち・ひと・しごと創生の取組みについてどのようにお考えでしょうか。

かつて農業が盛んであったことを活かして、本市でないと食べられない、買えないような作物を開発するなど、農業を重点に進めていくことを考えています。現在の農業離れは、農家に補助金を出し過ぎた国の政策により、農家が作物をつくらなくなってしまったことも原因の一つだと感じます。きちんと利益を出している農家は農協を通さないところもあり、今後進められる農協改革が農家のためになることを願っています。



井ノ崎支店長

また、本市には、新鮮な地元の酪農家のミルク工房もりや「のむヨーグルト」もありますが、新たに本市の名産品をつくることも考えています。酒造の盛んな自治体には乾杯条例があります。

本市にはアサヒビール茨城工場があるとはいえ、ビールで乾杯では特徴がないので、「地元産でいただきます」という運動を展開します。

これは、議員提案の政策条例「いただきます条例」によるものです。

新しくなった常磐自動車道守谷SAにある「守谷SAやさい村」の本市産野菜を販売するコーナーは大変盛況で、本市産の作物だけではなく、近隣の自治体の野菜も並べ、一緒にPRしています。



守谷SAやさい村 写真提供:守谷市

収穫したての野菜も魅力的ですが、付加価値をつけ、産業を生み出すために漬け物に加工することも一案です。2~3月のからし菜、夏の瓜、冬の白菜と農家の皆さんがつくった昔ながらの漬け物は大変おいしいものです。

●今後の展望について教えてください。

東京圏へ通勤している人たちのベッドタウンであることはこれからも変わらないでしょう。市内の住宅は戸建てが中心なので、移り住んでいただいた人たちは、本市を終の棲家として選んでくれたのだと感じています。また、守谷で育ち巣立った子どもたちが、大人になって再び守谷へ戻ってくるような施策を打ち出すことも重要だと考えて

います。現在は、親世代との同居は少なくなりましたが、それを物理的に可能にするために、建替えも含めて建築等の基準を見直すことも必要だと思っています。市内の戸建ての敷地面積は最低50坪、市街化調整区域内は最低100坪とする規制は続けます。市街化調整区域への住宅建築は、市内に10年以上居住した人に認められる特例があります。子どもが故郷=本市に帰ってこられるような施策をつくり、何代もこの動きが続けば、人口は減少することはないでしょう。老人保健施設や特別養護老人ホームの充実も今後図っていきます。



会田市長

駅前開発については、今後解決していかなければならない課題もあります。本市は転入してきた市民がほとんどであり、その大部分が首都圏へ通勤しています。市民の所得は高く、市内にはおいしい飲食店もたくさんありますが、TXが新しく開通し駅前が開発されたのに、守谷駅の周辺に日常の買い物ができるお店が少ないという要望などが市民から寄せられています。市内の大規模商業施設は駅から離れており、通勤帰りに買い物をするには少し距離があります。

TX守谷駅は常総線守谷駅と接しているため建設前から周辺には住宅が多数あり、500戸近くの市民の皆さんの協力により完成しました。駅周辺の区画整理事業は市が施行したもので、駅前の換地の所有者に、土地をまとめて商業施設を整備することを市から提案した経緯がありますが、まともならず、現在は、駐車場になっているところもあります。市民の消費動向は、衣料品等は東京に買いに行くことも多く、生鮮品は住居の近くで買っているため、駅前のスーパーマーケットも集客は期待できると思います。

●筑波銀行に期待することをお聞かせください。

本市で開催される年2回のイベントに参加し、地元の企業とともにイベントを盛り上げてもらっています。5月に開催した「MOCOフェスタ」では、復興支援ブースでは北茨城市と常陸大宮市の物産を紹介してもらい、好評を博しました。今後、地域振興が地域金融機関の果たすべき大きな役割となると感じています。

また、最近では、インターネットで店頭に行かなくても融資を受けられるなど、金融機関業務も新たなサービスが提供されているようです。平日はあまり家にいない市民には利便性が高いサービスであり、これからも地域の特性に合った柔軟な対応を期待しています。